

大 博物館だより

No.14
1995.10

津山郷土博物館



墨書土器「厨」 美作国府跡出土 津山市教育委員会蔵

津山市総社字客社で、植月壮介氏によって採集され、津山市に寄贈された須恵器高杯の脚部破片である。脚底部径151cm、脚部高110cmを測る。脚部はラッパ状を呈し、裾部は水平方向に大きく開く。端部は斜め上方に拡張し、外面にはナデによる一条の凹線をもつ。杯部は現存しないが、脚部の形状からみて皿状に大きく開くものと推定される。杯部と脚部は分割成型による。脚裾部内面に楷書で「厨」と墨書する。内外面ともナデ仕上げとする。胎土は細かい黒色及び白色砂粒を多く含み、灰白色に焼成されている。類例が乏しいので、時期を確定することはできないが、8・9世紀のうちに含まれることは確実であろう。

墨書銘の「厨」とは厨房の意で、国府の中の厨房部局に所属する食器であることを明示したものであろう。採集場所は推定政庁地区の南東約150mの地

であり、この地区に国府官人へ食膳を供給する官衙が存在した可能性がある。

美作国府政庁は儀式・饗宴を主たる目的とする施設である。まず、国守以下の国司・郡司らが庭に整列して、正殿に天皇が御すがごとくに拝礼する。しかる後に、国司が正殿に座し、郡司以下の拝礼を受ける。儀式の後は国司は正殿で、郡司らは東西脇殿に移って饗宴となる。現代風にいえば宴会政治といふところだが、古代では神聖な行事であった。天皇の代理としての国守を頂点とする官僚秩序を再確認し、かつ国司と在地豪族たる郡司らが天皇のもとでの共同体的連帯感をはかる場として儀式・饗宴が挙行されたのである。

このような饗宴用の食器として使用されたのが、この「厨」銘墨書土器ではなからうか。

研究ノート

すぎさかとうげ まんのたわ 杉坂峠 か万能峠か

1

美作・津山から播磨・姫路へ向かう国境越えの道筋については、古来杉坂峠越えと万能峠越えの二つがあった。このうち、杉坂峠越えは、岡山県作東町上福原から同町田原と兵庫県上月町皆田の境界の標高250mの杉坂峠を経て佐用町佐用に至るコースである。その間の距離は約14km、最大比高差は約140mを測る。現在、中国自動車道がほぼこのルートに沿って走行しているとともに、自動車用の舗装道路として現在も使用されている。

一方、万能峠越えは、作東町上福原から山家川沿いに溯り、同町土居と上月町稗田の境の標高212mの万能峠を経て佐用に達するコースである。その間の距離は約18km、最大比高差約100mである。現在、JR姫新線がこのルートを走っており、また国道179号線もこれに近いルートを取っている。ただし、万能峠道そのものは、兵庫県側の一部が荒れており、現在通行が困難となっている。

このような二つのルートは、後述のように歴史上それぞれに重要な位置を占めており、かつ時代によって盛衰がみられるのであり、決して一方が主、他方が従というような関係では捉えきれない。では、美作・播磨国境越えにはなぜ二つの主要ルートがあるのか。本稿ではその意味をさぐってみることにする。

2

まず、杉坂峠越えは南北朝時代の史料に現れる。『太平記』巻4によれば、正慶元年（元弘2、1332）備前の児島高德は、隠岐へ配流される途中の後醍醐天皇を奪還しようとして、備前と播磨の国境の船坂峠で待ち伏せしていたところ、天皇一行が今宿（現姫路市）から美作に向かったと聞き、急遽杉坂に駆けつけたが、すでに天皇らは峠をへて院庄に入ったあとであったとする。また同巻16に、延元元年（建武3、1336）新田義貞の武将江田行義が足利方の美作勢力を掃討するため杉坂に向かったとする。巻29にも、足利直義方の美作住人芳賀・角田の勢力が杉坂の道を塞いで足利尊氏方の高師泰の軍勢に対抗しようとしたとある。このように南北朝時代頃播磨から美作に入る主要道路が杉坂越えであることは事実

と認めてよいだろう。

次に、万能峠越えは江戸時代の出雲往来であり、津山藩主・松江藩主など大名の参勤交替路として整備された。『東作誌』英田郡江見庄土居村条に次の記事がある。

此邑往来宿駅と成たるは慶長九年以来也。其頃は北の方出合と云ふより室生坂を経（此所播作の界）播州稗田村へ出たるなり。森家の姫君（名不知、時代不分）此所にて卒去有しより今の往来に替る云々

この記事から、慶長9年（1604）出雲往来が杉坂越えから万能峠越えに変更されたとする説がある（『角川地名大辞典』岡山県「万能峠条」など）。だが、これは史料の誤読にもとづくものである。播州稗田村とは万能峠を下りたところにあり、杉坂越えでは稗田を通らない。出合と室生坂は不明だが、おそらく現在のほぼ国道179号線に相当しよう。『東作誌』の意味は次のようであろう。

土居が宿駅として整備されたのは森氏が美作に入封した翌年の慶長9年である。その時の出雲往来は室生坂越え（おそらくほぼ現国道179号線ルート）であったが、その後いつの頃か不明だが、森氏の息女がその地で死亡したのを忌んで現在の万能峠越えにルートを変更したのである。

このように、森氏入国時にはすでに万能峠越えの出雲往来が存在したのであり、森氏はそれを近世大名の立場で整備したにとどまると理解すべきである。従って、出雲往来のルートが、南北朝時代の杉坂越えから慶長9年以前のある時期に万能峠越えに変更されていることが知られる。

なお、『森家先代実録』巻5に、慶長8年（1603）3月森忠政の美作入国の際、播州杉坂越えをへて吉野郡下庄村（現大原町）へ入ったとする杉坂は、現在の釜坂峠のことと思われる。

3

古代の播磨国府（現姫路市）から美作国府（現津山市総社）へ至る山陽道美作支路のルートについては杉坂越え説が有力である。これは上記のような中世のルートを重視することと、播磨から美作に入る最短コースであることなどを論拠とする。しかし、その説では万能峠越えルート沿いに、土居廃寺・竹田廃寺という古代寺院跡が存在することが理解できないのではなかろうか。土居廃寺は作東町土居の山

家川右岸の段丘面上にある。発掘調査を経ていないが、軒瓦や鷗尾の存在や周辺の地形などからみて寺院跡の可能性が高い。その時期は瓦からみて、7世紀末頃から8世紀第I四半期にかけてと考えられる。竹田廃寺は土居廃寺の北西約1.8kmの同じく山家川右岸に立地する。軒瓦や丸・平瓦が出土しているが、狭小な地形などからみて寺院跡以外の可能性もある。

このように、竹田廃寺については多少の疑問があるが、土居廃寺が8世紀に存在したことはほぼ確実である。もし当時の官道が杉坂越えであるなら、土居廃寺はそれと全く無関係に立地することになるが、これは古代寺院の一般的立地条件に反している。むしろ、当時の官道を万能虬越えに擬定してはじめて理解可能となろう。ただし、土居廃寺の創建が7世紀末に溯るなら、713年の美作分国以前となる。その場合は、播磨作用郡家と美作英多郡家を結ぶ支路が起源となろう。

4

以上のように、杉坂越えと万能虬越えは盛衰を繰り返しながらも、どちらも重要なルートとして現在に至っている。では、なぜ美作・播磨国境越えに、わずか3.5kmと近接して二つの主要ルートが存在するのか。筆者はその理由を両者の性格の相違にみいだすのである。すなわち、杉坂越えは、距離が短いという長所に対し、標高が高くやや険しいという短所をもっている。このような道は人間の通行に適している。一方、万能虬越えは、逆に距離が長いという短所に対し、標高が低くなだらかという長所をもっている。このような道は徒歩よりも馬を利用したの通行に適している。比喩的にいえば、前者が人の道であるに対し、後者が馬の道というべきである。

美作・播磨国境路は、まず人の道として出発したであろうから、最初に整備されたのは杉坂越えと考えられる。それはおそらく古墳時代に溯ると推定される。和銅6年(713)美作国が新立され、まもなく国府が現津山市総社の地に設置された。律令国家は中央集権体制を採っており、中央政府の命令の伝達や地方からの報告を迅速かつ正確に実行することが要請された。そのために、都と全国の国府を結ぶ官道として山陽道以下の七道が整備され、原則として30里(約16km)ごとに駅が置かれ、それぞれに10疋から5疋までの駅馬が配備された。「延喜式」兵部省諸国駅伝馬条には、全国の駅馬・伝馬の設置

状況が網羅されているが、なぜか美作国の記事はない。しかし、播磨国に越部・中川の両駅があり、それぞれ新宮町馬立、三日月町新宿付近に擬定されている。これらは山陽道を太市駅(姫路市)から分岐して美作へ向かう道筋にあたっていることから、播磨国府から美作国府へ至る山陽道美作支路が設置されていたことはほぼ確実である。筆者はこのような官道整備の一環として万能虬越えが開発されたと考ええる。

古代律令国家が強力な中央集権体制であったに対し、11世紀から16世紀にかけての中世国家は地方分権的な体制であった。例えば、南北朝時代の法諺に「獄前の死人、訴えなくんば検断なし」(「東寺百合文書」)がある。これは、かりに牢獄の目の前で殺人事件が起こっても、訴える者がいなければ刑事事件にはならない、という意味である。この諺に象徴されるように、中世においては、国家権力は個別的な紛争にはできるだけ介入せず、事件はそれぞれの社会的権力が自前で解決することが期待された。このような分権的な体制のもとでは、集権的体制化に整備された万能虬越えでは効率が悪く、人の道としての杉坂越えが再び利用されるようになったのであろう。

ところが、織田・豊臣政権によって準備され、江戸幕府によって完成された近世幕藩体制は、律令国家とは違った意味での一種の中央集権国家であった。ここでは中央政府たる幕府のもとに、大名領国としての諸藩が割拠しているが、その藩主は幕府によって自由に廃立・更迭される存在であった。このため主従性表示のための参勤交代が重視されたのである。このような体制のもとで、馬の道としての万能虬越えが再評価されたと考えられる。明治以降の近代国家においても、近代の馬の道としての鉄道や自動車道はやはり万能虬越えでなければならなかった。

高度成長以後の現代は、以上のような二つのルートの長所・短所を克服してしまった。すなわち、険路としての杉坂越えの欠点は、昭和49年の中国自動車道杉坂トンネルによって克服された。高速道路では何よりも効率を重視するので、少々地形上の起伏を度外視してできるだけ最短コースをとろうとする。現代の馬の道たる中国自動車道によって、古代から近代に至るまで延々と繰り返された杉坂越えか万能虬越えかの争いは、ついに乗り越えられたのである。(湊 哲夫)

博物館からのお知らせ

◆平成7年度特別展

美作国府跡一埋もれた古代の役所—

平成7年10月7日(土)～11月12日(日)

昭和45年以來の25年間にわたる美作国府跡の発掘調査の成果を集約し、その8世紀から13世紀に至る変遷と性格を考えようとするものです。

記念講演会

日時／平成7年10月14日(土) 13:30～15:30

講師／奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター

山中敏史 集落遺跡研究室長

会場／津山郷土博物館2階研修室

演題／美作国府の調査をめぐって

聴講／無料(ただし、入館料が必要)

◆第13回企画展 正岡子規と大谷是空

平成8年3月23日(土)～4月21日(日)

津山出身の新聞記者大谷是空(1867～1939)と文豪正岡子規(1867～1902)との青年時代の交友を中心に、近代文学の黎明に焦点をあてようとするものです。なお、前号の行事予定欄で会期を3月16日からとしましたが、都合により上のおり変更しましたので、御注意ください。

記念講演会

日時／平成8年4月7日(日) 13:30～15:30

講師／大阪成蹊女子短期大学 和田克司教授

会場／津山郷土博物館2階研修室

演題／未定

聴講／無料(ただし、入館料が必要)

◆江戸一目図屏風秋期特別展示の中止

江戸一目図屏風の秋期特別展示として、11月16日から12月17日まで予定していましたが、館外貸出しのため本館での展示を中止しました。御了承ください。

<博物館入館案内>

- ・開館時間 午前9:00～午後5:00
- ・休館日 毎週月曜日・祝日の翌日
12月27日～1月4日・その他
- ・入館料 小・中学生 100円(80円)
高校・大学生 150円(120円)
一般 200円(160円)
※()は30人以上の団体

◆展示室・収蔵庫の燻蒸

平成7年6月25日～6月29日

去る6月25日から29日まで、全展示室・収蔵庫の燻蒸を実施しました。これは、エキボンという有毒ガスを用いて、室内の虫や細菌を殺虫菌するものです。博物館資料の劣化を防止するため、毎年6月頃に実施しています。

◆博物館の出版物の御案内

本館の出版物の在庫状況は次のとおりです。

| 書名 | 頒価 | 送料 |
|-------------------------------|---------|------|
| 美作の歴史と文化(常設展図録) | 800円 | 240円 |
| 法然と浄土教(特別展図録1) | 1,000円 | 240円 |
| 美作の近世絵画(特別展図録2) | 1,000円 | 240円 |
| 美作の鏡と古墳(特別展図録3) | 品切 | |
| 広瀬台山(特別展図録4) | 1,000円 | 240円 |
| 美作の白鳳寺院(特別展図録5) | 1,000円 | 240円 |
| 浅本鶴山の陶芸(特別展図録6) | 1,000円 | 240円 |
| 飯塚竹斎(特別展図録7) | 1,000円 | 240円 |
| 美作国府跡(特別展図録8) | 1,000円 | 240円 |
| 津山産パレオパラドキシア 化石産出調査報告(紀要1) | 900円 | 310円 |
| 津山城復元模型の製作過程(紀要2) | 品切 | |
| 愛山文書目録(紀要3) | 1,100円 | 310円 |
| 津山松平藩町奉行日記1(紀要4) | 1,000円 | 310円 |
| 津山松平藩町奉行日記2(紀要5) | 1,500円 | 310円 |
| 津山松平藩町奉行日記3(紀要6) | 1,100円 | 310円 |
| 津山松平藩町奉行日記4(紀要7) | 800円 | 310円 |
| 絵葉書 | 300円 | 240円 |
| 江戸一目図屏風複製品 | 10,000円 | 820円 |

御希望の方は直接来館されるか、現金書留でお申し込みください。

大 博物館だより No.14

発行年月日 平成7年10月1日

編集・発行 津山郷土博物館

〒708 岡山県津山市山下92

TEL(0868)22-4567 FAX(0868)23-9874

印刷(有)弘文社

大 は、旧津山松平藩の槍印で剣大といい、現在津山市の市章である。